

目次

死にそこねた死体 9

ブービートラップ 107

急募、クイック身代わり 213

この世を去る前に 305

ウルフとアーチーの肖像 403

訳者あとがき 406

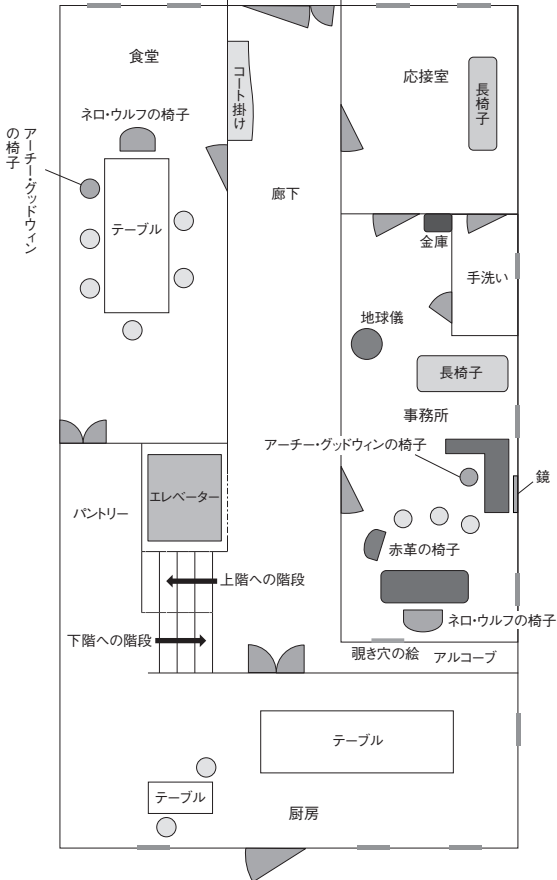
〈ネロ・ウルフ〉シリーズ著書一覧 418

## 主要登場人物

- ネロ・ウルフ……………私立探偵。美食家で蘭の栽培にも傾倒している
- アーチャー・グッドウイン……………ウルフの助手
- フリッツ・ブレunner……………ウルフのお抱えシェフ兼家政担当
- セオドア・ホルストマン……………ウルフの蘭栽培係
- クレイマー……………ニューヨーク市警察殺人課、警視
- パーリー・ステビンズ……………クレイマーの部下、巡査部長
- ロークリッフ……………クレイマーの部下、警部補
- ソール・パンザー……………ウルフの手助けをする、腕利きのフリーランス探偵
- フレッド・ダーキン……………ウルフの手助けをする、フリーランス探偵
- オリー・キャザー……………ウルフの手助けをする、フリーランス探偵
- マルコ・ヴクッチ……………ニューヨークの一流レストラン（ラスターマン）のオーナーシェフ。  
ウルフの幼なじみ
- ロン・コーエン……………『ガゼット』紙の記者、アーチャーの友人
- リリー・ローワン……………アーチャーの友人

ニューヨーク 西35丁目  
ネロ・ウルフの自宅兼事務所

1
2
3
4
5
6
7
ポーチ



\*ネロ・ウルフの家の間取りは作品によって若干描写が異なる

死にそこねた死体

## 第一章

高度がぐつとさがり、ポトマック川沿いのコンクリートの滑走路に着陸したのは、三月初旬、寒々しい月曜日の午後一時二十分だった。

このままワシントンに残るのか、それともデトロイトかアフリカ行きの飛行機に飛び乗るのか、見当もつかない。ぼくは空港の荷物室で鞆を確認してから、表に出てタクシーを停めた。それから二十分間、軍服や民間服姿の二百万人の政府職員が車や徒歩で行き交うなか、運転手が苦勞して車を進めるのを座席にもたれて観察した。その後のまた二十分間で、ぼくは、とあるビルに入って身分証明書を提示し、待たされ、廊下を案内されて、ついに大きな机のある大きな部屋へと通された。

合衆国陸軍情報部の最高責任者という代物に会うのは、それがはじめてだった。軍服姿で、時間も空間も無駄使いしない二重顎と二つの目の持ち主だった。ぼくは握手する気満々だったけれど、相手は座れと言っただけで、積まれた書類の一枚目に目をやり、素っ気ない事務的な声で、名前はアーチー・グッドウインかと尋ねた。

ぼくは曖昧に頷いた。軍事機密だろうからだ、正確にはわからないが。

不機嫌そうに質問が飛んできた。「まったく、ネロ・ウルフはどこが悪いんだ？」

「皆目わかりません。つまり、ウルフ氏は病氣なのですか？」

「きみは十年間ウルフのもとで働いていた。探偵業務で右腕となる助手として。ちがうのか？」

「おっしゃるとおりであります。しかしながら、ウルフ氏に具合の悪いところを見つけたことは、一度もありません。うまく当ててみると言われるのなら——」

「ジョージア州の騒動ではめざましい活躍をしたようだな、グッドウィン少佐」

「恐縮です。ネロ・ウルフの件ですが——」

「今から説明するところだ」情報部長は書類の束を押しやった。「そのために、きみを呼んだのだぞ。ウルフは頭がおかしいのか？」

「それも一つの見かたです」ぼくは難しい顔をして足を組んだが、今の立場を思い出して、足を戻した。「ウルフ氏は偉大な男です、それは保証します。ですが、（オーストラリアの唯一の食肉獣である野犬）がデインゴたる所以、人の手に負えなかつた点はおわかりですよ。助手というのは、適切な表現ではありません。自分はアクセル兼ブレーキでした。失礼ながら、現在のざつと三倍の給料をもらっていました。もちろん、大佐になれば——」

「少佐になってどれくらい経つ？」

「三日です」

部長はある単語、辛辣なただ一言だけを口にしました。

「イエス・サー」ぼくは答えた。

部長はぞんざいに頷き、この問題は完全に決着がついたことを示した上で、続けた。「ネロ・ウルフが必要だ。必ずしも軍服を着せる必要はないが、ウルフが必要なのだ。世間の評判に間違いないのかは知らんが——」

「間違いありません」ほくは断言した。「認めるのは不本意ですが、まさに名探偵です」

「結構。世間でもそういう評判だな。従ってウルフが必要となり、協力をとりつけようとしてきたのだ。クロス大尉とライダー大佐が面会にいった。ファイフ准将への訪問の依頼は断られてな。ここに報告書が——」

「扱いが間違っていたのです」ほくはにやりと笑った。「仮に中国の王様がいたとしても、ウルフ氏は自ら訪問したりはしません。二ヶ月前に自分が入隊してからは、家を一步も出ていないのではないかと思います。ウルフ氏の財産といえば、頭脳だけです。それを働かせる唯一の方法は、彼のもとへ持ちこむことです。事実、問題、関係者——」

情報部長は苛立ち、頭を振っていた。「もう、やってみた。ライダー大佐があるきわめて重大な問題に取り组ませようと出向いたのだが、あっさり断られてな。調査書によれば、ウルフはファシストでも、その協力者でもない。いったい、どこが悪いんだ？」

「どこも悪くはありません。そういう問題ではないのです。おそらく、機嫌が悪いのかと。ウルフ氏の機嫌は、些細な問題などではありません。もう一つ断った理由としては、もちろん自分の不在です。ただし、最大の問題は、ウルフ氏の扱いかたを心得ていない点であります」

「きみは心得ているんだな？」

「イエス・サー」

「では、なんとかしてこい。計画三十四日に基づいた日に、ウルフが必要になる。ライダー大佐が出向いた件では、今すぐ、緊急にウルフが必要だ。だれも手もつけられない状態なのだ。きみなら、どれぐらいかかる？」

「わかりません。時と場合によります」ぼくはかかとを合わせて、立ちあがった。「一時間か、一日か、一週間か、あるいは二週間かもしれません。自分は以前のように、ウルフ氏の家で同居する必要がありません。ウルフ氏への働きかけに一番効果的なのは、夜遅くですので」

「結構だ。到着したら、ガバナーズ・アイランドのライダー大佐に電話連絡を。進捗状況を報告し、ウルフ氏との面会の手はずが整ったら知らせろ」部長は立ちあがり、片手を差し出した。ぼくはその手を握った。「一刻を争うぞ」

階下の別室で、ニューヨーク行きの際の三時の飛行機に座席が優先予約されていることを知らされた。タクシーで飛行場に着いたときは、荷物の検量時間ぎりぎりまで、全力で走る羽目になった。